優秀

多様性を認め合う

相模原中等教育学校　3年　山田（やまだ）　莉子（りこ）

多様性とは何か。多様性を認め合うことはなぜ大切なのだろうか。ふと、そんなことを疑問に思ったことはないだろうか。実際わかっていない人も多いのではないかと思う。この疑問から私は、多様性を認め合うことから生まれるしあわせについて考えてみることにした。

多様性を認め合うということを世間が掲げているということは、そのように考える大きなメリットがあるのだと思う。そこで私は多様性を認め合うことのメリットを二つ考えた。一つ目は、物事を正しく認識することができるということだ。例えば、同じような考えを持った人でグループがつくられたとする。その場合、議論はスムーズに進むだろうが、最終的に出来上がったものはあまり良くないと思う。その理由は、視点が足りなかったから。物事を正しく理解ができておらず、問題点に気づくことができなかったのだ。一方、様々な意見を持った人が集まった場合だと、色々な方向から意見が飛び交い議論は長引くだろうが最終的には、抜けた部分のないものがつくられるだろう。つまり、物事を正しく認識して問題などに気づくために多様性が必要なのだ。二つ目は、多様性があることで私達がより良いものへと進化することができるということだ。一つの視点からしか物事を見ることができなければそこから前に進むことは難しい。つまり、多様性を失ってしまうと私達は進化していくことができないのだ。しかし、このように言っても行動に移せていないのが現状だ。

多様性について考えると、ＬＧＢＴや黒人差別、女性蔑視など様々なワードが出てくるがその内一つに障がい者というワードも出てくると思う。日本には約七八八万人障がい者がいると言われている。その中で労働可能人口は三三四万人で、一般企業で働いている人は十四パーセントである。実際は、多くの企業では依然として障がい者雇用の取り組みに積極的とは言えない状況が続いているのだ。

そこで、考えてほしいのが社会のための人ではなく、人が中心の社会を実現するということが一番重要なことなのではないかということだ。社会は本来、人を幸せにするためにかたちづくられたものだ。ところが、いつの間にか社会を維持するための人になってしまっている。今ある社会が前提とされ、そこに適応できない人が悪いという考え方がシステム化しているというのならば、改める必要があると思う。社会にはもともと多様な人達がいて、その一人ひとりがきちんと幸せになれる社会をつくる。そのことを忘れてはいけないと私は思う。

しかし、そんなに簡単には社会をつくりなおしていくことは難しいだろう。それでも、多様性を認め合うことは大切だということを掲げているのであれば、ある程度知っておくことも必要だと思う。その積み重ねで、一人ひとりが多様性についてを理解していく。そして、多様性を力に変えていくことができるような社会をこれから私達がつくっていくことこそが、最初にも提示した多様性を認め合うことから皆のしあわせへとつながるということではないだろうか。